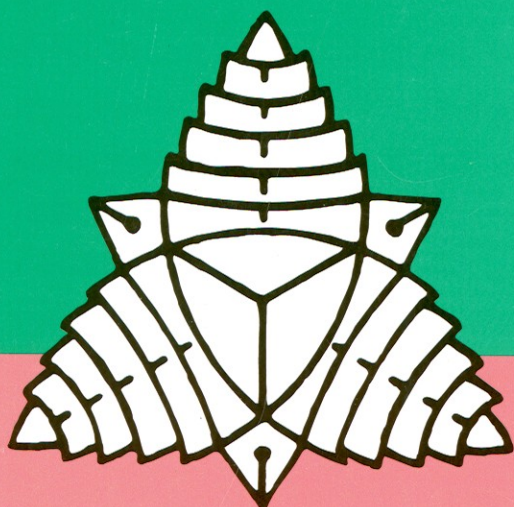


秋田県立秋田中央高等学校  
ラグビー部  
創部50周年記念誌

**50th**



**CHUOH**

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会

# 目 次

1. 秋田県立秋田中央高等学校校歌 秋田市立中学校校友会歌 .....	1	
2. 秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部部歌 .....	2	
3. 寄稿文		
秋田県立秋田中央高等学校学校長 .....	佐藤 弘 二 .....	3
秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会会長 .....	鈴木 建 男 .....	5
秋田県ラグビーフットボール協会会長 .....	小 沢 雄 象 .....	6
東北高体連ラグビー部専門委員長 .....	中 野 直 .....	6
秋田県立秋田中央高等学校教育振興会会長 .....	高 橋 昌 一 .....	7
秋田県立秋田中央高等学校卒業生父母の会会長 .....	佐藤 昭 男 .....	8
ラグビー部父母の会会長 .....	船 木 博 明 .....	9
前監督 現秋田県立秋田南高等学校教諭 .....	脇 坂 憲 雄 .....	10
秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部部長 .....	白 山 雅 彦 .....	11
秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部監督 .....	柴 田 久 寛 .....	13
4. 創部50周年記念式典式次第 .....	14	
5. 創部50周年記念祝賀会式次第 .....	15	
6. 創部50周年記念試合・チーム紹介 .....	16	
7. ラグビー部の概要と戦績 .....	21	
8. 歴代校長一覧 .....	24	
9. 歴代指導者一覧 .....	25	
10. 50年のあゆみ 20周年記念誌から .....	岡 正三郎 .....	26
	岸 信 夫 .....	27
	西 村 進 .....	28
	福 岡 政 弘 .....	28
	滝 田 謙 .....	29
写 真 集 .....		32
11. 寄稿文 .....	菅 原 昭 一 .....	42
	武 石 健 哉 .....	43
	船 木 第 輔 .....	44
12. 広 告 .....		47
13. OB会会員名簿 .....		75
14. 記念事業担当一覧 .....		98
15. 編集後記 .....		98



秋田県立秋田中央高等学校校歌

(昭和36年11月25日制定)

作詞 山田千之  
作曲 井上武士

秋田市立中学校校友会歌

一、かがやく 峰の 太平に  
祖国の夢を 育くみて  
朝な夕なに若人の  
理想を とともに 語るもの  
さざめく校旗は われらの校旗は  
めざすよ 自主の はばたきを

二、寄せては ひらく 日本海  
しぶきの花に 目ざめつつ  
きよく生い立つ 瞳こそ  
正義を つねら さ叫ぶもの  
明けゆく道は われらの道は  
かざすよ 文化の 高鳴りを

三、みどりの丘の 高清水  
ゆたかなさちを いろどりて  
仰ぐ先哲 まなびつつ  
歴史を あらた 飾るもの  
誓いの汗は われらの汗は  
描くよ 世紀の 躍進を

一、東太平洋 高く  
天際遠く雲を抜く  
雄物の川の溶々と  
流れて西に入るところ  
山河の粋をあつめ来て  
正気漲るこの天地

二、歴史もゆかし秋田城  
聖の帝みくるまを  
駐め給ひし岡の辺に  
護国の神霊ぞ鎮もれる  
忠魂永久に芳しく  
咲くや万葉の桜花

三、常磐の松の裾野原  
仰ぐ豊ぞわが母校  
燃ゆる斗魂いや高く  
学園護る我ら伴侶  
寒風雪に荒べども  
眉宇に巖たりその気魄

四、戊辰の青史勤皇の  
誉も高きわが郷土  
先哲垂れしみをしへしを  
心にしめて慕ら  
重き使命を身におびて  
断呼と誓う負荷の任

五、金色燦と帽章に  
輝く翼若鷹は  
夢にも描く若き子の  
理想育む姿なれ  
御稜威に明くる新日本  
雄飛せんかな諸共に

表紙 校章 郷土秋田を象徴する矢留城を図案化して中央に配し、蜂をもって協同・

勤勉を、ペンをもって学問を象徴している

# ラグビー部歌

一、北風のただ中に白雪踏んで

蹴れば奮い立つ、ラグビー中央

抜山の威力蓋世の意気

ラグビー中央ここに在り

吾等がフイフティーン

フイッピッププレー中央　ダッシュユアンドゴー

二、灼熱の炎天下、肉弾相搏つ

青春の血は躍る　ラグビー中央

敢斗の熱　あふるる気力

ラグビー中央　いざ進め

我等がフイフティーン

フイッピッププレー中央　ダッシュユアンドゴー

三、世の波は荒れ狂い、道地に墮つるとも

敵として揺るがざる　ラグビー中央

ひたすらに往け大丈夫のみち

ラグビー中央いざ共に

吾等がフイフティーン

フイッピッププレー中央　ダッシュユアンドゴー



## 花園で迎える新春

高校球児が甲子園を目指すように、高校ラグーマンは花園を目指す。





## 「鍛える」

秋田県立秋田中央高等学校長

佐藤 弘 二

本年、創部五十周年を迎えられましたラグビー部に対し、衷心よりお慶び申し上げます。半世紀にわたる歩みの中には、数々の栄光の歴史が刻まれており、改めて敬意を表するものです。今、まさに、スポーツ全盛の時に当たり、本校ラグビー部も新たな歴史の構築に向かって邁進しなければならないと存じます。多くの先輩諸氏は勿後のこと、本校ラグビー部に多大なる御尽力をいただいております多くの皆様に、今度とも本校ラグビー部の益々の隆盛の為に旧に倍する御支援を賜りますようお願い申し上げます。

ここで、全くの門外漢ですが、少々思うところを述べさせていただきます。

中学生のころ、ラグビーの歴史やルールについて学んだとき、大いに感動したことがありました。それは試合の日程が決定されればどんな条件下でも試合は決行されるという決まりを知ったことでした。その時教師は「雨が降っても槍が降っても」という表現を使ったように思います。同時に、これはヨーロッパの精神風土から生まれたものであることも教えられたように記憶しています。屋外スポーツのほとんどが雨や風のためにしばしば中止を余儀なくされることを多く見知っていたので、いやに新鮮で、すごいスポーツもあるものだと思ったわけでありました。

以来ラグビー競技に対して敬意と興味を持ったことを覚えているわけですが、時には泥だらけになって敵味方の識別もできないような中でよく戦えるものだと、ただただ感心したり、又、あのタックルやスクラムなどに見られる強靱な体力、気力にも驚嘆させられます。その外、「魔法の水」「ノーサイド」などという粋な言葉も知りました。

そんなことから考えさせられたことに、一体人間はどこまで鍛えられることができるものだろうかということでした。筒井康隆氏の小説の中にあつた少々誇張したものながら大いに興味をそそられるものがありました。相撲の話なのですが、場所とはあるスナック、まだ髪も結えない序の口ぐらいの、いわゆるふんどし担ぎが中年の酔客からからかわれて仕返しをするのですが、この土俵上ではいかにも弱いこのふんどし担ぎが、その酔客の首根っこをつかんで、ぼりぼりという音とともに、ひねり殺すというストーリーがありました。私は若者独特の雰囲気の良い描写よりも、このような

力をつけるために鍛えているふんどし担ぎの日頃の鍛練に思いをいたしたのです。つまり、人間は鍛え方によっては想像もできない程の肉体的な変化を可能にし、他に倍する力をも自分のものにすることができるのだということを学んだのです。

このような「鍛える」という営みは、単にスポーツのみに限られたことではないのです。昨今、生涯学習とか生涯スポーツという言葉が叫ばれているのは、惑は、人間、生涯自己を鍛え続けなければならないということかもしれません。しかも、「鉄は熱いうちに打て」という言葉もあるように、鍛える時期というものも当然の如くあるはずで、それが高校時代に当たるようにも思うのです。どうか、ラグー達よ、心身の鍛練を重ね、生涯にわたる財産をこの時期に自分のものにしていただきたいものです。同時に本校ラグビー部の発展のために奮起することを期待いたします。







## 50年の歩み

秋田中央高校ラグビー部OB会会長

鈴木 建 男

昭和21年に産声をあげて以来、栄えある秋田中央高校ラグビー部が、創部50年目と言う輝かしい年を迎える事が出来ましたことは、ラグビー部OB会長として喜びにたえません。

この歴史の中で足跡を残された先輩諸氏そして多くのOB諸氏のお力添えの賜物と心より感謝申し上げます。顧みますと昭和21年春に秋田市内第3番目の中等学校ラグビーチームが誕生して以来、秋田市立中学、市立高校、県立秋田中央高校と変遷はありましたが、全国大会5回、国体3回（1回優勝）出場と言う輝かしい歴史を刻んでおり、特にその中で花園大会の第一回大会に名を残した事は、今でも忘れることができません。

この記念すべき年に、関東の雄であります専修大学、全国の高校ラグビー界に名をとどろかしている盛岡工業高校をご招待する交流試合を企画いたしましたところ、両チームからは快諾を得、多くの皆様から御賛同、御協力戴き開催出来ます事を感謝申し上げます。

この50周年を大きなバネとして、秋田中央高校ラグビー部の更なる飛躍を期待するものであり、その為に現役諸君は日々汗を流して鍛練に努力し、OB諸氏にはラグビー部員当時を回顧し炎を燃やして応援をお願い申し上げます。

最後にこの記念すべき事業に協力していただいた関係各位に感謝申し上げますと共に、今後益々秋田中央高校ラグビー部が限らない発展をとげられますように、ご支援をお願い申し上げます。



## 創部50周年によせて

秋田県ラグビーフットボール協会会長

小 沢 雄 象

県立秋田中央高等学校ラグビー部創部50周年おめでとうございます。

昭和21年の創部以来、全国高等学校選手権大会出場5度、国体出場3度、うち昭和41年大分国体優勝と輝かしい実績を持つ高校ラグビー界の古豪でございます。OBにも関東学生、東日本社会人、東北社会人リーグ等で多くの選手が活躍し、日本ラグビー界に対する貢献度は多大なものがあります。

しかしながら、近年県内での戦績は春、夏を制するものの秋の全国高校選手権においては決勝で破れる事、私の記憶するところ5度～6度ではないような状態が続いております。この50周年を契機に古豪の完全復活を関係各位にお願いし、6度目の全国高校選手権出場を心待ちに致しております。

最後に、これまでのOB、学校当局、父母会の皆様の努力に敬意を表し今後のさらなる発展とご活躍を祈念し、ラグビー部創部50周年のお祝いの言葉と致します。



## 祝 辞

東北高体連ラグビー部専門委員長  
(秋田県立金足農業高等学校ラグビー部監督)

中 野 直

ラグビー部創部50周年という節目のある慶賀を迎え、学校はもとより、OB、同窓、そして関係者の胸中は感銘の極みと推察いたします。一口に50年とはいってもこの間、時代のすう勢とともに種々な出来事、思い出があったらうと思います。例えば校名からして、最初は土崎高等女学校、秋田市立高校、そして県へ移管され秋田中央高校と歴史があります。当然、入学してくる生徒の質的、男女の比率、目的意識の違いがあったらうし、そのような状況下で50年間、ラグビー部が継続できたということは、まことに素晴らしいことであり、まさしく“継続は力なり”を証明していることと評価する次第であります。

また私が知っている範囲では、校内の顧問として佐藤・岡・岸・西村・渡部(公)・高橋(秀)・内藤・藤野戸・脇坂・現在の白山・柴田といった諸先生がたに、OBでは駒野谷・近藤・工藤・佐々木・小坂・菊地・桜田・佐田・金といった方々の御指導、御支援の姿が思い浮かびます。勿論、記載されなかった関係者諸氏の御尽力も今日まで支えになったことは、いうまでもありません。

昨今、ラグビーを取り巻く環境は必ずしも良好とはいえません。生徒数の減少、サッカーやバ



スケートボールへの人気集中の中での入部部員の減少、その他種々な要素でのラグビー離れで苦境に立たされております。指導者の立場としては、勝ち負けにこだわるよりも、むしろ部の存続、素材の優劣うんぬんよりも一人でも多くラグビー部に入り、まっとうしてもらいたいと思う気持ちが本音の時期にさしかかっております。これは全国的な傾向で、ラグビー王国秋田といえども同様な事情であり、高体連ラグビー専門部としてもその対策をどのようにすべきか考慮しているところであります。

秋田工高を頂点に全国にその名をはせてきた秋田県の高校ラグビーですが、秋田高、金足農と共に練磨し本県ラグビー界を背負ってきた秋田中央高ラグビー部OBの皆様は、この厳しい現況を御理解いただき、より以上の情熱で母校並びに本県高校ラグビー界を御支援賜りたいものと、衷心よりお願い致します。

最後に秋田中央高校ラグビー部の益々の御発展、OB諸氏のご健勝を祈念申し上げます。改めて創部50周年、おめでとうございます。



## “静かに燃ゆる闘魂” に期待して

秋田県立秋田中央高等学教育振興会会長

高橋 昌一

創部50周年を迎えられました秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部の輝かしい歴史と伝統に敬意を表しますと同時に、50周年記念誌の刊行をお喜び申し上げ衷心よりお祝い申し上げます。

本校ラグビー部の創部は昭和21年、そして昭和27年東北大会で優勝・平成元年・3年も優勝を手中に収めております。又昭和28年の第32回全国高等学校ラグビー選手権大会に初出場、以来5回の全国出場を果たし、勇名を轟かしたほか、第21回国民体育大会（大分・昭和41年）では優勝の金字塔をうちたてており、輝かしい戦績と歴史を持つ名門ラグビー部であります。

ラグビー王国秋田といわれ、ラグビーの名門校、伝統校の多い秋田で、こうした見事な戦績を残し得たのは、技術以上の何か一つ、それは諸先輩が連綿として築きあげてきた“静かに燃ゆる闘魂”が集積された結果に他ならないと存じます。

本校ラグビー部が誕生した当時は、終戦直後の荒廃・混乱・食料難にあえぐ時代の中で、本校の周囲も、將軍野の原野そのままでした。その逆境にもめげず、高清水の丘で学び、スポーツに青春の汗を流し、今日の発展の礎を築いたものでした。以来、秋田市の発展とともに校史を続け、昭和57年には市立高等学校から県立へ移管され、昭和60年には待望の教育振興会が結成されたのであります。

教育振興会も発足12年目を迎えました。学習指導の強化、部活動の振興、教育施設・設備の充実などにつきまして逐年目的達成のため努力しているところであります。

さて本校は、学業とスポーツの文武両道のバランスがとれた素晴らしい学校に成長しました。良き伝統と校風のもと、さらに切り拓いて進むたくましさ、気構えが求められます。

それはあたかもラグビーの強引なスクラムであり、気迫であり、フェアプレーであります。

本校ラグビー部が初めて全県への扉を開いたのが昭和28年。その当時名コーチとして活躍された駒野谷竹蔵さんの言葉に「華やかさよりも静かに燃える下積みの闘魂が、ラグビーに於ても、人生に於てもいかに尊いか」と部員に教えられたことが、今でも語り草となっています。けだし「ラグビー教育」を知る名言だと思います。

このときからラグーマンの情熱と闘魂の素晴らしい歴史が刻みはじめ今日に至ったのであります。

1996年平成8年は創部以来半世紀の大きな節目であります。

この記念すべき節目を飛躍台に全国制覇をめざして、楽しいぶつかり合い、強烈な攻撃タックルで見事なトライを重ねるよう期待します。洋々たる前途をフェアプレーの心意気で乗り切ってください。

この意義深い年を杖に、更に躍進されますとともに秋田県立秋田中央高等学校の益々のご発展を祈念申しあげ、お祝いの言葉といたします。



## 創部五十年を祝う

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部  
卒業生父母の会会長

佐藤 昭 男

創部五十年に欣快を感じます。創部以来今日まで、教職員はじめ、多くの諸先輩が血の滲むような奮闘刻苦により、今日の伝統を築き上げられましたことに頭の下がる想いです。

私は、この機に臨み、次の三つのことを考え投稿する次第、それは、何事もそうであるように、その意味を噛みしめてみたわです。

その一つは、「天の時」であります。創部の頃は、戦中、戦後の混乱期であったでしょう。そのような状況の中に在っても、真理を求めて止まない若者にその道場とも言うべき、学校を設立させずにおかなかった「天が与えた時」があったわけです。

また一つは、「地の利」であります。天下絶景の地、高清水ヶ丘は自然の宝であります。それにも増して、全国にその覇権を許さぬ伝統を誇る秋田工業があり、ダークホース的存在の金農健児の台頭と、回りには求めずして優れた群勇割拠の地の利の中心にあったのが、吾が中央高校である。賢明なる先輩達はこれを見逃すことはなかったのです。

そして、三つ目は、「人の和」であります。そこには、天・地の利をはるかに超えて、燃え盛る魂の炎がありました。指導者と、同志が、まさにスクラムを組み、他の部のように整った条件もない、文字どおり、辛苦をはねのけての基礎づくりの毎日であったことと思います。その結晶が今日の土台となっているのです。

近年、特に、秋田中央高校の教育が万般に亘って飛翔し、高い評価を得ておることは、創学以来、教育活動、スポーツ活動の両輪が素晴らしく調和していることがその因としてあげられます。



創部五十年、多くの優れた人材を世に輩出しているを見直し、この節目に、今日の隆盛の、バックボーンとなっていることであろう三つの視点を味わい、初心忘るべからずの言葉の如く、いよいよ勇飛、健闘されることを祈って、貧筆を置きます。



## 創部五十周年に寄せて

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部父母の会会長

船 木 博 明

私の高校時代、花園出場当り前、全国優勝当り前、そんな三年間でした。

そのせいもあり、ラグビーの県大会花園予選は、よく観に行きました。

決勝戦の相手は、時に金農、たいがいは中央高校（市立高）、試合の内容は、常に僅差。目指す花園までいま一步というところで悉く秋工ことごとに敗れ去る姿は印象的でした。

それでも次の年猛然と、かつ果敢にアタックし、結果勝運無く敗れ、八橋のグラウンドにうつ伏せに成り、両の手で土をひっかくようにして慟哭する選手の姿に自身の人生をだぶらせ感動し、もらい泣きした事を思い出します。

そんな事も有り、いつのまにか中央高校のラグビーファンになっていたのでしょうか。子供の進学校は迷わず中央高校ラグビー部でした。おかげ様で二男、三男、あわせて五年間連続、父母の会々員として、ラグビーを満喫しております。

今年の三年生は人数こそ少ないですが、粒よりの九人、勝負事にはもって来いの数字、二年生は三年生の部員不足を補って余りある猛者揃いの十五名です。

今年希望に燃え入学、入部して来た一年生部員はいまのところ十三名です。

大から小、フォワード、ハーフ、バックス向きと実にバランスのとれた、これも選りすぐりの人材です。

外野で「ガヤガヤ」「ワイワイ」の親から観ても、監督、選手の活気、やる気は例年以上、春の遠征でもかなりの自信を付けてきた様子、こんな現象も五十周年の影響か。

脇坂名監督からバトンタッチされた若き闘将柴田監督のもと、中央ラグビー部五十周年に花を添えるべく、監督、選手一丸となり頑張っております。

物心両面、御支援、御援助という言葉はよく使われますが、今年程中味の濃い、内容のある援助を必要としている年はなかろうかと思っております。

ウェートトレーニング場、部室の整備も急務です。力のあるOBの練習相手も今直ぐ必要です。部を強くする遠征、練習試合も欠かせないでしょう。

何を為すにも学校、OB、父母、支援者、皆々様の全面的な御協力なくしては、為し得ません。各自、各人、できる事から早目の御支援、宜しくお願い申し上げます。

勿論、私共父母の会も全力で頑張ります。家庭でも出来る子供の教育、体力強化、維持管理等に全力を注ぎます。試合応援も今まで以上に大声で頑張ります。今年こそ勝って涙を流したい。



# 回顧録

前監督・現秋田県立秋田南高等学校ラグビー部監督

脇坂 憲雄

私が18年間在職して金足農業から県立秋田中央に勤務になったのは、昭和57年春でした。以来、平成6年3月迄の12年間にわたり燦たる歴史のある、秋田中央高校ラグビー部顧問として在籍できました事は長い私のラグビー人生の中でも最も充実した年月でした。

ここに50周年を迎えた秋田中央高校ラグビー部の一部の試合の記録を掲載し私の回顧録としたいと思います。

昭和57年度 主将 佐藤 明

【第62回大会予選】

準決勝 秋田工業30  $\left(\begin{smallmatrix} 16-10 \\ 14-6 \end{smallmatrix}\right)$  16秋田中央

昭和58年度 主将 金子 玄

【第63回大会予選】

準決勝 秋田工業25  $\left(\begin{smallmatrix} 3-6 \\ 22-0 \end{smallmatrix}\right)$  6秋田中央

昭和59年度 主将 佐藤浩美

【第64回大会予選】

準決勝 秋田中央9  $\left(\begin{smallmatrix} 9-0 \\ 0-6 \end{smallmatrix}\right)$  6経法大附

決勝 秋田工業36  $\left(\begin{smallmatrix} 10-0 \\ 26-0 \end{smallmatrix}\right)$  0秋田中央

※秋田中央8年ぶりの決勝進出

※秋田工業花園で優勝

昭和60年度 主将 佐藤 望

【第65回大会】

決勝 秋田工業30  $\left(\begin{smallmatrix} 12-3 \\ 18-0 \end{smallmatrix}\right)$  3秋田中央

※中央支部総体優勝

昭和61年度 主将 斎藤啓夫

【第66回大会】

決勝 秋田工業11  $\left(\begin{smallmatrix} 4-3 \\ 7-3 \end{smallmatrix}\right)$  6秋田中央

※ラグビー部創部40周年記念

※17年ぶり県体優勝山梨国体出場

※3年吉田渉 (S.O) 高校日本代表でニュージーランドへ遠征

昭和62年度 主将 三浦弘樹

【第67回大会】

準決勝 秋田中央9  $\left(\begin{smallmatrix} 3-3 \\ 6-6 \end{smallmatrix}\right)$  9男鹿工業

秋田中央抽せん勝

決勝 秋田工業14  $\left(\begin{smallmatrix} 3-0 \\ 11-4 \end{smallmatrix}\right)$  4秋田中央

※宇野の幻トライ

※秋田工業全国優勝

昭和63年度 主将 武石健哉

【第68回大会予選】

1回戦 男鹿工業15  $\left(\begin{smallmatrix} 9-0 \\ 6-4 \end{smallmatrix}\right)$  4秋田中央

※男鹿工業決勝で7-7の抽せん勝で全国大会初出場

※武石健哉高校日本代表でニュージーランド遠征

平成元年 主将 北嶋幸悦

【第69回大会】

決勝 秋田工業4  $\left(\begin{smallmatrix} 0-0 \\ 4-0 \end{smallmatrix}\right)$  0秋田中央

※第35回全国高校総体17年ぶりの優勝

秋田中央20  $\left(\begin{smallmatrix} 10-3 \\ 10-12 \end{smallmatrix}\right)$  15秋田工業

※第40回東北選手権大会初優勝(1部)

決勝 秋田中央16  $\left(\begin{smallmatrix} 4-3 \\ 12-6 \end{smallmatrix}\right)$  9黒沢尻工

※北嶋幸悦高校日本代表としてスコットランドへ遠征



平成2年度 主将 高橋和行

【第70回記念大会予選】

決勝 秋田工業16  $\left(\begin{smallmatrix} 4-3 \\ 12-6 \end{smallmatrix}\right)$  9 秋田中央

※第41回東北選手権大会優勝(2部)

決勝 秋田中央16-13 三本木農

※秋田工業50回目の花園出場

※秋田中央高校学校創立70周年記念

平成3年度 主将 佐藤栄光

【第71回大会予選】

決勝 秋田工業28  $\left(\begin{smallmatrix} 12-0 \\ 16-0 \end{smallmatrix}\right)$  0 秋田中央

※第37回全県高校総体優勝

決勝 秋田中央12  $\left(\begin{smallmatrix} 0-6 \\ 12-4 \end{smallmatrix}\right)$  10 秋田工業

※第42回東北選手権大会優勝(1部)

決勝 秋田中央9  $\left(\begin{smallmatrix} 0-0 \\ 9-4 \end{smallmatrix}\right)$  4 盛岡工

平成4年度 主将 前野良太

【第72回大会予選】

準決勝 秋田工業27  $\left(\begin{smallmatrix} 13-3 \\ 14-5 \end{smallmatrix}\right)$  8 秋田中央

平成5年度 主将 白幡 学

【第73回大会予選】

2回戦 男鹿工業18  $\left(\begin{smallmatrix} 3-3 \\ 15-10 \end{smallmatrix}\right)$  13 秋田中央

平成6年度 主将 安藤宏平

【第74回大会予選】

2回戦 秋田工業15  $\left(\begin{smallmatrix} 0-3 \\ 15-3 \end{smallmatrix}\right)$  6 秋田中央

平成7年度 主将 山王丸誠

【第75回記念大会予選】

決勝 秋田工業47  $\left(\begin{smallmatrix} 27-0 \\ 20-5 \end{smallmatrix}\right)$  5 秋田中央

以上、私が秋田中央に在職していました昭和57年から平成5年迄の成績を書きましたが、私が直接部員と共に汗を流したのは昭和59年から平成3年迄の8年間だけでした。その8年間に7回決勝で秋田工業と対戦しましたがついに一度もその牙城を破る事は出来ませんでした。でも8年間良い部員達に恵まれ、自分のラグビー人生の最高の思い出でした。

本当にありがとうございました。

秋田中央高校ラグビー部の益々のご発展をお祈り致しまして私の回顧録といたします。



## 真のラガーたれ

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部部長

白山 雅彦

この数年部員数が減少している。新入部員が10人前後しか入らなくなって2~3年がたつ。これは全国的傾向で本校だけのことではない。全国に名だたるラグビー王国秋田県にとっても将来を考えると頭が痛い状態が続いている。ブームでサッカーやバスケットボールの人気は高いのに、なぜラグビーをやる若者が減ってきたのだろうか。ラグビーを扱ったコミックやアニメの登場を待つしかないのか。いや、そう簡単には解決できないものがあるように思われる。

ラグビー精神とは何か。それは『ノーサイドの精神』だといわれる。すなわち、ゲーム終了の

ホイッスルが吹かれた瞬間に敵味方がなくなり、皆ラグビー仲間として互いに健闘を讃え合い友情が生まれるというものである。しかし、その前提には「自分の身体を犠牲にして仲間やチームのために尽くす」という大切な精神があることを忘れてはならない。真のラグーは生きたボールを出すために、マイボールにするために、前進するために、トライに結びつけるため等、常に自分の身体をはってプレーをする。その真摯な姿勢が勝敗は別にして試合の後で敵とも通じ合うことになる。更にそのためには、普段から強靱な肉体と頑固な精神力を養うための鍛練がなければならない。それは地味で、泥まみれになって黙々とコツコツと積み重ねる日々の努力によって培われるものである。

最近の世相には「自分さえよければいい」といった自己中心的な考え方が広まっている。相変わらずいじめがなくならないのもその現れである。一方、労働界では3K業種が人手不足で困っているということも伝えられた。きつい・きたない・苦しい等の仕事が若年労働者には敬遠されているのである。こうした風潮がラグビー界にも影響していると考えられる。

こうした時代にあって、自分の身体をはって仲間やチームのためにプレーするラグーは稀少価値的存在である。

秋田中央高校ラグビー部は昔から決して部員数が多かったわけではなかった。しかも部員の大半がラグビー経験のない素人で、彼らは3年間かかって真のラグーになる。私は昭和63年～平成4年までは協坂憲雄監督の、平成6年～今年まで柴田久寛監督のもとでそうした部員達と接してきたが、どの年の選手達も勇猛果敢なプレーを随所に見せてくれ、何度も感動を与えてくれた。

決して恵まれた環境にあるわけではない本校も、振り返ってみると今迄数多くのラグーを世に輩出してきた。OB諸氏の枚挙にいとまがない程の輝かしい活躍の跡が50年間の実績として語り継がれ、グラウンドに息づいている。

今後も本校ラグビー部の半世紀にわたって築いてきた伝統を継承し、更に発展させてゆくことが我々に与えられた課題である。主役たる部員は心身共に鍛練して逞しくなり、臆することなく前進して欲しい。大胆かつ繊細に。そして真のラグーになるように努力して欲しい。それが花園への道にもつながるはずだ。

OB会、父母の会、学校、関係各位の物心両面にわたる暖かい御支援に衷心より感謝を申し上げると共に、今後更なる御指導御鞭撻の程、何卒よろしくお願いいたします。

創部50周年、誠におめでとうございます。





## 15人一体のthinkingラグビーを

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部監督

柴田久寛

現代のラグビーは変わってきていると言われているが何が変わってきているのだろうか。チーム技術・技能なのか、個人技術・技能なのか。

秋田中央高校ラグビー部のカラーは、昔からFW中心とか、BK中心というカラーではなく、15人一体でゲームをするというのがカラーであり、伝統ではないかと考える。15人一体とは、ラグビーの3Cからなる。コンタクト・コントロール・コンセントレーションを一人一人が技術として持つことであり、それをチームとして考え、ゲームをすることではないかと私は思う。この3Cが果して、現代の新しいラグビーにあてはまるのだろうか。私は自信を持ってYesと答えを出すであろう。なぜなら、3Cとはラグビーの基本であると答えるからである。いくらラグビーの考えが変わってきても基本を変えることはできない。基本がすべてであり、基本ができ初めて応用プレーが出来ると考える。しかし基本だけ教えているのでは、なかなか上達はしない。そこで部員には常に何のための練習であるかを考えさせている。練習をただ練習と考えさせるのではなく、この練習はゲームではどの場面で通用するのか、どのようにすればゲームに役立つのかということなどを常に考えさせ、自分達で答えを出させる。そして答えがっているのかをその場面で言うのではなく、実際に練習させてみて一緒に考えよりよい答えを出している。まだ100%このことが出来ているとは言えないが、これから近づけるよう努力していきたい。これが私の考える新しいラグビーである。

創部50周年というすばらしい年に監督ができることは非常に光栄である。また、部員にとっては、これ以上うれしいことはないであろう。この節目の年を部員共々大切に考え、前に述べたことを実行できるようこれからも努力していきたい。そして、今まで築きあげてくれた諸先輩達の輝かしい伝統に恥じないよう、これから新しく、すばらしい伝統を作っていきたい。

最後に、関係各位のこれまでの物心両面にわたる暖かいご支援に心より感謝を申し上げますと共に、今後更なるご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い致します。

# 創部50周年記念式典

平成8年6月1日(土)

午後 5時30分

シャインプラザ平安閣

OB会幹事長

司会 海野 達雄

## 式典次第

1. 開会の辞 創部50周年実行委員長 那波 達造
2. 校歌斉唱
3. 黙 禱
4. 式 辞  
秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会 会長 鈴木 建男
5. 挨拶  
秋田県立秋田中央高等学校 校長 佐藤 弘二
6. 祝 辞  
秋田県ラグビーフットボール協会 会長 小沢 雄象  
秋 田 市 長 石 川 錬治郎
7. 祝電披露
8. 感謝状贈呈 被表彰者 脇坂 憲雄 佐々木幸悦  
菊地 達雄
9. 謝 辞 被表彰者代表 前監督 脇坂 憲雄
10. 記念品贈呈
11. 部歌斉唱
12. 閉会の辞 創部50周年実行委員長 那波 達造

(敬称略)



# 創部50周年記念祝賀会

平成8年6月1日(土)

午後 6時30分

シャインプラザ平安閣

OB会副会長

司会 近野 信義

## 祝賀会次第

1. 開会の辞

2. 挨拶

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会副会長 佐田 博

3. 祝辞

衆議院議員 二田 考治

秋田県高体連ラグビー部会長 高橋 功一

4. 乾杯

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部第一期生 吉田 洋

5. 祝宴

6. テーブルスピーチ

7. 万才三昌

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会副会長 開発 邦彦

8. 閉会の辞

秋田県立秋田中央高等学校ラグビー部OB会副会長 佐藤 環



# 秋田中央高校ラグビー部創部50周年

## 記念試合

試合日 平成8年6月2日(日)

場 所 秋田市営八橋陸上競技場

第1試合 盛岡工業高校 対 秋田中央高校

午後0時30分 キックオフ

レフリー 近藤周平

第2試合 専修大学 対 中央高校OB選抜

午後1時35分 キックオフ

レフリー 秋山 渉



# 岩手県立盛岡工業高校



創部50周年おめでとうございます。

またこの記念すべき年に交流試合にお招きいただき誠に光栄に存じます。力を尽くして試合に臨む覚悟です。貴部のますますのご発展をご祈念いたします。

さて、盛工ラグビー部は昨年創部50周年を迎え、新たな半世紀へと踏み出しました。

戦後間もない昭和20年秋、上田校舎に持ち込まれた楯円球が部を結成させ、昭和25年には全国大会(西宮)初出場。以来昨年の第75回大会まで通算23回出場、優勝2回、準優勝2回、ベスト8進出8回、国体では優勝1回、準優勝3回など成果をあげてまいりました。

昭和50年代～60年代10数年間の低迷期を経て平成6.7年と連続して花園出場、往年の力がよみがえってきたようです。盛工ラグビー部を略年譜で紹介します。

- 1945 (昭和20) ラグビー同好会として活動開始
- 1946 (昭和21) 部昇格
- 1950 (昭和25) 第30回全国大会初出場(西宮)(1)
- 1951 (昭和26) 第31回全国大会出場ベスト8(2)

- 1953 (昭和28) 第33回全国大会出場ベスト8(4)
- 1954 (昭和29) 第9回北海道国体初出場 準優勝
- 第34回全国大会 ベスト4(5)
- 1956 (昭和31) 第36回全国大会 準優勝(7)
- 1957 (昭和32) 第37回全国大会 ベスト8(8)
- 1958 (昭和33) 第38回全国大会 準優勝(9)
- 1959 (昭和34) 第14回東京国体 準優勝
- 第39回全国大会 ベスト8(10)
- 1961 (昭和36) 第41回全国大会 ベスト8(12)
- 1962 (昭和37) 第17回岡山国体 優勝
- 第42回全国大会 ベスト8(13)
- 1963 (昭和38) 第43回全国大会 ベスト8(14)
- 1964 (昭和39) 第19回新潟国体 準優勝
- 1965 (昭和40) 第45回全国大会 優勝(15)
- 1970 (昭和45) 第50回全国大会 優勝(17)
- 1973 (昭和48) 第53回全国大会 ベスト8(19)
- 1991 (平成3) 第71回全国大会出場(21)
- 1994 (平成6) 第74回全国大会 3回戦(22)
- 1995 (平成7) 第75回全国大会(23)

部長 山影 雅      監督 小笠原 常雄      コーチ 橋本 俊幸

No.	氏名	学年	No.	氏名	学年	No.	氏名	学年
①	田山 剛志	3	10	吉田 忍	3	19	多田 勝弘	3
2	大峠 勝利	3	11	藤原 一真	3	20	氣田 進	2
3	鷹羽 欣也	2	12	阿部 篤	3	21	佐々木 涼	3
4	斉藤 俊介	3	13	榮田 佑希	2	22	作山 佳寿	3
5	細川 隆行	2	14	廣内 陽一	2	23	堀内 哲	3
6	泉山 義文	2	15	細川 進	3	24	佐々木 伸吾	2
7	宮野 隼	2	16	澤田 祐	2	25	米島 貢	3
8	阿部 貴章	2	17	工藤 裕輔	2			
9	藤原 卓也	3	18	八幡 稔	3			



# 秋田県立秋田中央高校



## 目指せ花園！

部長 白山 雅彦    副部長 佐々木 望    監督 柴田 久寛  
 コーチ 滝田 栄    コーチ 佐々木 成久

No.	氏名	学年	No.	氏名	学年	No.	氏名	学年
1	金城 裕之	3	10	土橋 儀史	2	19	鎌田 直	2
2	夏井 智寛	2	11	大久保 佑太	3	20	斉藤 俊介	2
3	鈴木 俊彦	2	12	斎藤 忠良	2	21	熊地 亮	2
4	菅原 誠	2	13	小玉 康誉	2	22	佐藤 陽輔	2
5	笹渕 裕	3	14	松澤 毅	2	23	佐藤 壮志	2
6	高石 洋平	2	15	斎藤 勇吾	3	24	安藤 大樹	1
7	船木 幸司	3	16	伊藤 雅文	3	25	伊藤 悠	1
⑧	白幡 友也	3	17	高桑 修平	3			
9	加藤 洋一	2	18	佐藤 光	3			



# 専 修 大 学



学校創立 明治13年  
創 部 昭和4年

過去の成績  
リーグ戦グループ優勝5回  
大学選手権出場7回

部 長 大 島 良 行 監 督 作 山 公 一

コ ー チ 仲 宗 根 弘 明 コ ー チ 小 野 弘 樹

No.	氏 名	学年	No.	氏 名	学年	No.	氏 名	学年
1	池 島 剛	3	15	大 東 毅	4	29	武 田 勝 晃	3
2	池 渕 辰 彦	3	16	安 藤 宏 平	2	30	南 畑 嘉 史	3
3	後 藤 宜 徹	3	17	谷 崎 正 祥	2	31	鈴 木 慎 平	2
4	高 橋 智 幸	1	18	北 浦 虎	4	32	沢 木 純	2
5	目 黒 祐 一	4	19	武 石 尚 也	4	33	吉 田 雄 二	2
6	新 郷 勝	4	20	河 口 剛	2	34	西 山 和 幸	4
7	小柳出 幸 二	3	21	田 村 強	4	35	吉 田 尚 史	3
8	泊 祐 樹	2	22	鶴 賀 隆 之	4	36	杉 由 久	3
9	佐 藤 重 臣	4	23	伊 藤 護	3	37	山 本 幸 宏	1
10	清 水 豊 通	4	24	根 岸 祐 人	3	38	西 岡 正 晃	4
11	馬屋原 誠	3	25	岡 野 清 紀	4	39	肥 後 隆 之	2
12	松 坂 康 之	3	26	鈴 木 洋 平	4	40	米 丸 裕 也	2
13	田中地 洋 介	1	27	野 崎 竜 司	2	41	久 英 司	2
⑭	舛 尾 敬 一 郎	4	28	作 山 公 介	3			

日本代表キャップOB

小 西 義 光 (S55卒) 高 鍋 → 専大 → サントリー  
村 田 互 (H2卒) 東福岡 → 専大 → 東芝府中  
小 野 真 司 (H4卒) 花園 → 専大 → 東芝府中

# 秋田県立秋田中央高校OB選抜



監督 金 義悦 (金 豊 店)

コーチ 鈴木 光 (秋田市役所)      コーチ 佐藤 康信 (東芝府中)

No.	氏 名	所 属	No.	氏 名	所 属	No.	氏 名	所 属
1	佐藤 浩美	秋田市役所	10	熊谷 勝	秋田市役所	19	山崎 学	東北電力
2	布袋屋 広基	東北電力	11	佐藤 康樹	東北電力	20	高山 和治	秋田市役所
3	武石 健哉	東芝府中	12	白幡 学	秋田市役所	21	北島 正幸	東北電力
4	田中 龍幸	N E C	13	富樫 透	秋田市役所	22	宇野 豊治	秋田市役所
5	前野 良太	N E C	14	宮腰 一範	東北電力	23		
6	佐藤 康信	東芝府中	15	吉田 涉	秋田市役所	24		
7	三浦 弘樹	東北電力	16	長岡 宗	秋田市役所	25		
8	阿部 宇宏	山 二	17	佐藤 望	東北電力			
9	北島 幸悦	東北電力	18	鈴木 光	秋田市役所			



## 秋田中央高校ラグビー部の概要と戦績

昭和21年	ラグビー部結成
22年 5月	春季秋田県大会にて初めて秋工を破る（秋工グラウンド）
23年 6月	第3回全県7人制大会に参加
10月	全国新制高校ラグビー県予選に参加
24年 5月	全県7人制ラグビー大会高校決勝 秋工B21～3秋市立
9月	国体予選 準決勝 秋田南（現秋高）21～3秋市立
25年 9月	第1回県体 三位決定戦 秋市立25～8秋田南
10月	第30回全国高校ラグビー秋田県予選 決勝 秋市立13～6金足農（秋工は推薦出場）
11月	第30回全国高校ラグビー東北予選 決勝 金足0～0秋市立 3反則5 金足優勝
26年 9月	第2回県体 決勝 秋工37～0秋市立
27年10月	全国大会県予選 決勝 秋市立8～0金足農（秋工推薦）
11月	全国大会東北予選 決勝 秋市立5～0盤城高（全国大会初出場）
28年 1月	第32回全国大会（西宮）1回戦 淀川工9～6秋市立
6月	全県高校選手権 決勝 秋工17～0秋市立
8月	全国高校選抜大会（八橋ラグビー場新設記念）1回戦 秋市立11～3村野工 2回戦 保善8～0秋市立
9月	第4回県体 決勝 秋市立3～0秋高 ※秋工23年ぶりに県内大会で敗れる（秋高12～8秋工） 第3回東北ラグビー選手権兼国体東北予選 決勝 秋市立21～0秋田高（国体初出場）
10月	第8回国体（高松）1回戦 秋市立30～0高松商 2回戦 秋市立0～3同志社商
29年 9月	八橋ラグビー場一周年記念 金足農29～3秋市立 秋工23～3秋市立
30年10月	全国大会県予選 準決勝 秋工28～0秋市立
31年 9月	第7回県体 決勝 秋工8～5秋市立
10月	第36回全国大会予選 秋市立41～3経大付
11月	第36回全国大会奥羽予選 決勝 金足農24～15秋市立
32年 6月	第3回全県総体 決勝 秋工11～0秋市立
33年10月	第38回全国大会県予選 決勝 秋工21～0秋市立
11月	同奥羽予選 決勝 秋工20～0秋市立
34年 9月	第14回国体東北予選 決勝 秋市立6～6盛工
10月	同国体（東京）準決勝 興国高5～3秋市立
11月	第39回全国大会奥羽予選（秋工推薦） 決勝 秋市立6～0金足農（2度目の全国大会出場）
35年 1月	第39回全国大会（西宮）1回戦 秋市立8～6洛地 2回戦 秋市立0～3四条畷高
10月	第40回全国大会県予選 決勝 秋工20～0秋市立
11月	同奥羽予選 決勝 秋工18～0秋市立
36年10月	第41回全国大会県予選 決勝 秋市立6～0金足農（秋工推薦） （奥羽大会なし）（3回目の出場）
37年 1月	第41回全国大会（西宮）1回戦 秋市立17～8大口 2回戦 秋市立13～0仙台工 3回戦 秋市立5～8熊本工
9月	第13回県体 決勝 秋田工16～3秋市立
10月	第42回全国大会県予選 決勝 秋市立15～3金足農（秋工予選で初めて敗れる） （2年連続4度目の出場）
38年 1月	第42回全国大会 1回戦 秋市立5～13天理（天理優勝）

- 8月 第14回県体 決勝 秋田工36～3 秋市立
- 39年4月 合宿所(図南寮)完成 ラグビー部が第1号春合宿を行う
- 40年10月 第45回全国大会県予選 決勝 秋市立5～0 秋高(秋工推薦)(5度目の出場)
- 41年1月 第45回全国大会 1回戦 秋市立9～16福岡
- 5月 中央地区大会 決勝 秋市立11～10秋工(中央地区初優勝)
- 6月 第12回高校総体 決勝 秋市立24～0 金足農(秋工18連覇成らず) 初優勝
- 9月 第17回県体 決勝 秋市立18～3 秋高
- 10月 第16回東北選手権兼第21回国体予選 決勝 秋市立15～0 黒沢尻  
第21回国体(大分) 1回戦 秋市立14～11山口農 準決勝 秋市立19～6 慶応  
決勝 秋市立14～3 大分舞鶴(初優勝成る)
- 42年6月 第13回高校総体 三位決定戦 秋工36～0 秋市立(この年3年生不在)
- 43年5月 中央地区大会 決勝 秋市立5～6 秋工
- 10月 第48回全国大会県予選 決勝 秋市立6～16秋工  
東北選手権大会 決勝 秋市立8～22秋工
- 44年5月 中央地区大会 決勝 秋市立14～0 金足
- 6月 第15回高校総体 決勝 秋市立0～32秋工
- 10月 第49回全国大会県予選(秋工推薦) 決勝 秋市立0～6 金足
- 45年6月 第16回高校総体 三位決定戦 秋市立14～6 経大付
- 46年6月 本年度から改正ルール トライ4点となる
- 47年6月 第18回全県高校総体 決勝 秋市立20～6 秋田工
- 8月 県体 高校 決勝 秋田工8～6 秋市立
- 48年5月 中央支部総体 三位 経大付12～4 秋市立
- 6月 第19回全県高校総体 三位 秋市立17～6 金足農
- 49年5月 中央支部総体 三位 秋市立8～4 経大付
- 6月 第20回全県高校総体 三位 秋市立18～0 大館工
- 50年6月 第21回全県高校総体 決勝 金足農24～0 秋市立
- 51年6月 第22回全県高校総体 決勝 金足農26～4 秋市立
- 11月 第9回全県高校新人 決勝 秋田高22～0 秋市立
- 52年5月 中央支部高校総体 三位 秋市立10～4 秋田工
- 53年6月 第24回全県高校総体 三位 金足農26～15秋市立
- 54年5月 第22回中央支部新人 三位 秋市立24～7 秋田高
- 55年5月 第23回中央支部総体 三位 金足農12～7 秋市立
- 56年5月 中央支部高校総体 三位 秋市立17～10金足農
- 57年4月 秋田県立秋田中央高校となる
- 6月 昭和町元木山陸上競技場開設記念招待試合 金足農13～9 秋中央
- 9月 第15回全県高校新人 決勝 経大付31～4 秋中央
- 58年7月 第34回県体 三位 秋中央52～0 能代工
- 59年6月 第30回全県高校総体 三位 秋中央18～10金足農
- 10月 第17回全県新人 決勝 秋田工44～3 秋中央  
第64回全国高校県予選 決勝 秋田工36～0 秋中央
- 60年5月 第28回中央地区大会 決勝 秋中央28～0 男鹿
- 7月 第35回県体 決勝 秋中央12～34秋工
- 10月 第65回全国大会県予選 決勝 秋中央3～30秋工
- 61年7月 第36回県体 決勝 秋中央19～12秋工(20年ぶりの優勝)
- 9月 第15回中央支部新人戦 決勝 秋工36～15中央



10月 第66回全国大会県予選 決勝 秋工11～6 中央  
 62年 7月 第38回県体 三位決 中央35～0 経法附  
 9月 第16回中央支部新人戦 三位決 中央56～0 経法附  
 10月 第20回全県新人戦 準決勝 中央56～0 経法附  
 63年 9月 第17回中央支部新人戦 準決勝 中央16～4 金足農  
 10月 第20回全県新人戦 決勝 秋工14～0 中央  
 平成元年 6月 第35回全県高校総体 決勝 中央20～15秋工  
 6月 第40回東北高校選手権 決勝 中央18～14黒沢尻  
 7月 第40回県体 決勝 秋工10～3 中央  
 8月 第1回協会招待試合 決勝 秋工16～15中央  
 11月 第69回全国大会県予選 決勝 秋工4～0 中央  
 2年 6月 第36回全県高校総体 決勝 秋工18～9 中央  
 6月 第41回県体 決勝 男鹿工22～16中央  
 8月 第2回協会招待試合 決勝 男鹿工16～4 中央  
 10月 第70回全国大会県予選 決勝 秋工16～9 中央  
 10月 第23回全県新人戦 決勝 秋工10～8 中央  
 3年 6月 第36回全県高校総体 決勝 中央12～10秋工  
 IBC杯 決勝 盛岡工23～19中央  
 第42回東北高校選手権 決勝 中央9～4盛岡工  
 8月 第3回協会招待試合 準決勝 目黒高56～0 中央  
 10月 第71回全国大会県予選 決勝 秋工28～0 中央  
 4年 5月 第4回協会招待試合 準決勝 石巻工19～14中央  
 9月 第21回中央支部新人戦 決勝 秋工67～13中央  
 10月 第72回全国大会県予選 準決勝 秋工27～8 中央  
 5年 7月 第44回県体 三位決 中央48～13秋田南  
 9月 第26回全県新人戦 決勝 秋工64～19中央  
 10月 第73回全国大会県予選 二回戦 男鹿工18～13中央  
 6年 6月 第40回全県高校総体 三位決 中央17～12金足農  
 7月 第45回県体 決勝 男鹿工17～0 中央  
 第6回協会招待試合 三位決 中央27～14青森北  
 10月 第74回全国大会県予選 二回戦 秋工15～6 中央  
 7年 7月 第46回県体 決勝 中央17～0 金足農  
 10月 第75回全国大会県予選 決勝 秋工47～5 中央

(この記録は秋田県ラグビーフットボール協会の資料を参考にさせていただきました。)

## 歴 代 校 長

氏 名	就任年月日	転退任年月日	在任年月	出身地
<b>秋 田 市 立 中 学 校</b>				
金丸 欽也	昭和17年3月18日	昭和17年10月19日	7 月	秋 田
大高 常彦	“ 17年10月20日	“ 20年11月29日	3年1月	山 形
久司 慶三	“ 20年11月30日	“ 23年4月1日	2年3月	和 歌 山
<b>秋 田 市 立 高 等 女 学 校</b>				
出 藤 吉	大正9年9月15日	大正9年11月30日	3 月	秋 田
白坂 高重	“ 9年12月1日	“ 11年3月14日	1年3月	“
“	“ 11年3月15日	“ 14年3月31日	3年1月	“
出 藤 吉	“ 14年5月15日	昭和2年3月25日	1年10月	“
桧山 畏三郎	昭和2年3月31日	“ 5年2月25日	2年11月	“
君田 貞二	“ 5年3月31日	“ 6年3月31日	1 年	“
沢 清五郎	“ 6年4月1日	“ 12年3月31日	6 年	千 葉
伊藤 孝一	“ 12年4月1日	“ 13年3月28日	1 年	秋 田
“	“ 13年3月29日	“ 16年10月10日	3年6月	“
高橋 四郎	“ 16年10月11日	“ 16年12月5日	1 月	“
戸沢 佐明	“ 16年12月6日	“ 20年11月29日	4 年	“
末野 忠道	“ 20年11月30日	“ 22年5月31日	1年6月	“
木村 二郎	“ 22年6月1日	“ 22年7月3日	1 月	山 形
佐々木 高一	“ 22年7月4日	“ 23年3月31日	9 月	秋 田
<b>秋 田 市 立 高 等 学 校</b>				
久司 慶三	昭和23年4月1日	昭和26年3月31日	3 年	和 歌 山
渡部 清	“ 26年4月1日	“ 26年5月2日	1 月	山 形
刈田 文雄	“ 26年5月3日	“ 37年9月30日	11年5月	秋 田
竹内 栄治郎	“ 37年10月1日	“ 37年10月31日	1 月	“
武田 幾之助	“ 37年11月1日	“ 40年3月31日	2年8月	“
青柳 吉隆	“ 40年4月1日	“ 48年3月31日	8 年	“
中山 健	“ 48年4月1日	“ 49年3月31日	1 年	“
深井 博之	“ 49年4月1日	“ 51年3月31日	2 年	“
坂田 良一	“ 51年4月1日	“ 56年3月31日	5 年	“
三浦 智孝	“ 56年4月1日	“ 57年3月31日	1 年	“
<b>秋 田 県 立 秋 田 中 央 高 等 学 校</b>				
三浦 智孝	昭和57年4月1日	昭和60年3月31日	3 年	秋 田
小盤 巖	“ 60年4月1日	“ 63年3月31日	3 年	“
佐藤 暹	“ 63年4月1日	平成2年3月31日	2 年	“
高橋 彰三郎	平成2年4月1日	“ 4年3月31日	2 年	宮 城
高橋 實	“ 4年4月1日	“ 6年3月31日	2 年	秋 田
須釜 宣夫	“ 6年4月1日	“ 8年3月31日	2 年	“
佐藤 弘二	“ 8年4月1日			“



## 秋田中央（市立）高校ラグビー部歴代指導者等一覧

年度	部長	副部長	監督	父兄会長	OB会長	年度	部長	副部長	監督	父兄会長	OB会長
昭和21	小竹 信行		小竹 信行			平成1	白山 雅彦		脇坂 憲雄	佐藤 正春	佐々木幸悦
22	"					2	"		"	佐々木一信	"
23	西村 進	佐藤 敬	西村 進			3	"		"	向島 偕	"
24	"				吉田 洋	4	"	総監督 脇坂 憲雄	柴田 久寛	山王丸英雄	佐田 博
25	"				"	5		脇坂 憲雄	"	安藤 善明	"
26	"				"	6	白山 雅彦		"	安藤 譲	鈴木 建男
27	"				"	7	"		"	山王丸英雄	"
28	"				"	8	"	佐々木 望	"	船木 博明	"
29	"				"						
30	"				"						
31	岸 信夫	岡 正三郎			"						
32	"				仁村 治策						
33	"				"						
34	"				"						
35	"		渡部 公男		"						
36	"		"		"						
37	"		"		"						
38	"		"		"						
39	西村 進		"		伊藤 良吉						
40	"		"		"						
41	"		"		"						
42	"		"		"						
43	"		"		"						
44	"		"		小坂金四郎						
45	青柳 吉隆		工藤 義行		"						
46	斉藤 政敏		渡部 公男		"						
47	"		"		"						
48	高橋 秀雄		"		"						
49	木内 幸雄		内藤 徳男		"						
50	"		"		"						
51	"		"		"						
52	"		"	伊藤 金作	"						
53	"		"	滝田 哲雄	佐々木幸悦						
54	"		"	若狭 良一	"						
55	渡部 公男		"	佐藤 忠美	"						
56	"		"	佐藤 正美	"						
57	"		"	池田 幸悦	"						
58	"		"	金子 重治	"						
59	脇坂 憲雄		脇坂 憲雄	佐藤 忠美	"						
60	"		"	安田 友一	"						
61	藤野戸彦人		"	石塚 忠一	"						
62	"		"	三浦 清弘	"						
63	白山 雅彦		"	武石 肇	"						

# 創部二十周年記念号から

昭和四十一年七月に発行された二十周年記念誌のなかから、創部当時のお話がありましたので、再掲させていただきます。

## ラグビー部の顧問の思い出

岡 正三郎

(元ラグビー部長 現生活部長)

昭和31年4月、新学期を迎えて驚いたことには岸信夫先生と共に私には全く経験のないラグビー部顧問をおおせつかったことであります。それまで陸上競技部の顧問であつた私はラグビー部顧問として責任をはたすことに自信がもてませんでしたので固辞しましたが刈田学校長のお許しがなく、遂にコーチャーを認めていただくことでひきうけました。そしてコーチャーには国鉄土崎工場の駒野谷竹蔵氏の御承諾を得て、不安の中にもラグビー部顧問としての生活が始まったのです。

この年の主将は宇佐美君でFWには大谷、高野、貝田の諸君、バックスには紫野、平沢の諸君等おり大型チームでした。全国大会出場権をかける奥羽大会決勝戦で金足農業高校に終始敵陣内で戦いながら不運にも3対0で敗れたこと出場の選手諸君と共に終生私の心に残ることと思います。それに忘れることのできないのは護国神社境内遺族会館における夏合宿とそろいのユニフォームなく選手諸君がいろいろなジャージーを着て試合に臨んだことです。

第2年目の32年度の主将は加賀谷君でこの年は全国大会県予選決勝戦で金足農業高校を破り優勝、奥羽大会出場権を得て久方ぶりで県外遠征できることとなりました。大会出場は酒田市日和山公園でした。遠征の車中、秋田魁新聞紙上に静岡国体における秋商サッカー部のマナーの良さは優勝以上の価値あるものと静岡で高く

評価されておる旨の記事があり、わが部もこのようにしようと岸先生、駒野谷さんと相談、宿舍その他における選手の生活指導には大変気を配りました。しかし結果はまたもや金足農業高校にしてやられ、無念の涙をのんだのです。

3年目の33年度の主将は塩谷君で今八幡製鉄所で活躍している山岡君も3年生でした。この年も奥羽大会(会場は青森市)に出場し、準決勝で秋田高校とまみえましたがこの試合も印象に残る白熱した戦いでした。山岡君の独走そしてまわりこんでのトライ、そしてコンパト成功、これが我方に勝利をもたらしたのでした。しかし決勝戦は秋田工業にかなりの差で敗れたのです。にもかかわらず土崎駅頭の盛大な出迎えには非常な感激を覚えました。

4年目34年度の主将は小野君でした。春の地区大会で秋田工業に決勝、決勝戦では金足農業と引き分けにおわりましたが非常な自信をえたのです。苦節4年、遂に4年目に私達の努力精進がむくわれる時がまいりました。そして東京国体出場と全国大会出場という偉業を達成したのです。

許された紙数がオーバーしているので詳しく記されませんが、「ローマは一日にして成らず」。今日の市高ラグビー部活躍の源は実はこの20年の間先輩諸兄が精進努力して築かれもたらされたものであることを現役の諸君は決して忘れてはなりません。

最後に市校ラグビー部の今後の発展を心から祈つてペンをおきます。



## 再び全国大会に出るまで

岸 信 夫

(元ラグビー部長 南高在職)

苦るしかつた事はそれが苦るしかつた程過ぎ去れば忘れ得ない思い出となる。昭和32年11月再度決勝で金農に敗れてひきあげて来た酒田の宿で程苦らしい事はなかつた。思えば超高校級と云われた選手をひきいて、くるぶしを没する泥濘と、しのつく雨の八橋に3-0で涙をのんでから1年。10月の県予選で優勝しながら又も苦杯をなめるとは、くる日もくる日もただひとすじに思いをかけて来たのに、心のむなしさはいやすべきすべもなく3人はただ仰臥して夫々の思いに天井をみつめるのであつた。

去る年の春、ラグビーのラの字も知らぬのに懇請もだし難く就任し、総勢わずか18人、宿もなくコーチの駒野谷さん自ら工機部から蚊帳を借り、岡部長が雑巾がけ、私が天びんで水を吸み生徒に練習をさせたあの夏合宿以来。すべてをなげうってラグビー—すじに生きてきたのであつてみれば……やがて岡先生が静かに旧山形高校の寮歌を……そして私に「岸先生、ここまで来たのだ……今一度…元気を出してやろうじゃないか」……そしてその夜、一文の報酬もなく全くだ自己をギセイにしてやつて来てくれた駒野谷さんが生徒に対するミーティングで「私もここまで来たからには勝つまでやる」と……、悲荘と云うか悲痛と云うか、肺腑をしぼることばとふんいきであつた。そしてこの時の1年生が長じて4年目遂に秋田県はじまつて以来秋工以来のどのチームもなしたことがなかつた同一年度に国体全国大会双方出場の金字塔をうちたてるのである。廢墟から立ち上がる力、悲運を超えて栄光の峰にはい上がる力、この力こそ

が市立ラグビー部に第二期黄金時代をもたらした力であつたと思う。心が出来ていなくても何かの拍子で勝つことはある。しかしそう云う勝ちはその後の長い人生に生きる価値ではない。ベートーベンではないけれど「苦悩を通して歎びへ」。学業にはげみ、校則を愛し心の充実した生徒が探身の力をかたむけてラグビーに当たる時、得られた勝利は長く人生に生きる価値であり、ラグビーをはなれた価値である。「世の波は荒れ狂い、道地に墮つるも、厳として揺るがざるラグビー市高」部の創始者小竹信行先生作りし部歌3番の精神は岡先生、駒野谷さんからうけつぎ、その後本当にお世話になった近藤幸作さんの心から推奨する私の精神であり、永遠にうけついでもらいたい精神である。

昭和33年度は青森での秋高をやぶつた一戦、34年度の土磯の不眠不休の合宿、35年度の県代表問題のゴタゴタと酒田の善戦、36年度のインターハイ準決進出、37年度の天理との天下わけ目、その都度の選手諸君の顔顔顔、一緒に苦労した先輩の顔顔顔、思い出は無限である。折角の名作がいつしか夏の歌のみとなっていたのを岡先生の創意で私が当時増田の校長としていた小竹先生に手紙をさしあげ本来ウインタースポーツであるラグビーは「北凡のただ中に白雪踏んで……」と返事をもらい、さらにある年のミーティングで小坂さん、工藤さんなどが「世の波は……」などの3番を記憶していて失なわずに記録しえたのもなつかしい思い出である。同窓生各位の前途の多幸を心から祈り、かつ現役あつてのクラブであれば現役諸君の必勝の精進を切望して私の市立時代のすべてであつたラグビーの手記とします。

## ラグビー部創成時代の思い出

西 村 進  
(現ラグビー部長)

私が本校に着任後まもなく、小柳先生と共にラグビー部を受持たされました。何しろ海軍時代に斗球なる名目であの楕円球を奪い合った記憶があるだけで、ラグビーなるもののルールも分らない始末。それにどの生徒を見ても身体つき、態度など皆若輩の私にとっては猛者ばかりに見えました。何しろ小竹先生の猛烈な気力と練習の鍛え方を部員から聞く度に関心させられたものです。その内にグラウンドに出る度にルールも覚え、部員の顔も知り、時には一緒に走り廻りました。当時の主将は笹淵君で秋田工業との試合では60点も点差をつけられた状態でした。昭和24年頃になって漸く部も充実し、渡辺昌二郎君が主将となり部員も30名を越えました。確かこの年の部の送別会が船川線天王の米谷君宅で行われた時です。当時は送別会に部員もドブクロを飲んで盛んに気炎を挙げ、自分達の時代には是非とも全国大会に出場しなければならないと誓いを立てました。

そして昭和25年初めての東北大会出場、福島での宿敵金足との決勝、私と小竹先生はグラウンドの周りを一喜一憂、遂に同点反則の差で敗れた時のくやしきは忘れる事が出来ません。小坂主将を中心にして、グラウンドの中央で泣き乍ら動こうとしなかつた姿が今でも思い出されます。

この悲しみと怒りが翌年見事全国大会初出場の栄誉をもたらせました。

その年の日大ラグビー部での合宿、そして全国大会1回戦で淀川工高と対戦、前半のリードも後半逆転され敗退しましたが、部員の一人神田君は泣き乍ら、レフリーに抗議を申込むと云っ

て聞かず、これをとどめるのに苦労しました。しかし之を契機に過去5回の全国大会出場、2回の国体出場と立派な歴史を作り、ここに二十才を迎えた訳です。故人となった何人かの先輩の他に、幾多の血の汗の結晶である二十年の歴史を今後も発展させたいものと考えます。

思い出の記

## 熱い砂漠 わが青春の墓碑銘

福 岡 政 弘  
(25年卒)

昭和22年10月24日、われわれは正月の大会をかけて秋工と対峙していた。その試合が一年間の最後の公式戦であつたし、市立中学校ラグビー部創立2年目の全運をきめる総決算の日でもあつた。その大事な試合開始の瞬間に於て、私は不逞にも、勝利をではなくて、ひそかに敗北を念じていたのである。勝ちたくはなかつた。勝つて全国大会へなど出たくはなかつた。ということである。場合によつては勝つかも知れない、ということである。事実その年の春の第1回目の大会では、創立1年にして最小得点ながら秋工を破り、さきがけのスポーツ欄のトップをかざつたし、続く7人制大会では些細な事故で決勝戦では小差で秋工に勝ちをゆづつたものの、勝てる、という十分の自信はもつていた。秋田中学(秋田高校)には2年間(昭和21、22年)というものただ一度のおくれをとつたことはなかつた。金農チームにいたつては昭和22年われわれのコーチによつて誕生したチームである。ボックスには当時の全県陸上競技界に1、2を競つた駿足を揃え、フオワードの力また抜群であつた。おそらくその頃の全国最強ではなかつたかと今猶私は信じている。



当時の市立高校の周辺は住宅もまばらで、殆んどが砂原であった。われわれはその砂原を砂漠とよんでいた。夏の砂丘は熱い。敗戦直後の窮乏生活の時代である。スパイクをはかない裸足は容易に熱砂の中にめりこんでいった。酷暑の頃の苦しい練習がつづいて、砂漠から芽生えたものは、何が故に、如何なる理由で、という悩みと懐疑であった。毎日の練習量が積み重なって、次第に私の胸の中に内功していった。私が毎日練習に出るのはチームに対する責任からであった義務感からであった。練習そのものに対する興味はいささかもなかつた。この苦しみは、私にとって、人生の何たるかを知る第一の関門であったかも知れない。

その日おそろしい先輩達の叱咤激励のもとに、秋工チームは恐怖に駆られて走りまくった。先輩の一人もなく、懐疑派をかかえてのわがチームとの勝敗の結末は明らかであった。24-0の大きなスコアであった。レフリーをされた小竹先生の懸命の配慮も空しくわれらは無気力に破れ去ったのである。

2年間で名実共に全国最強のチームに仕立上げようと計画された小竹先生の熱情にチームの大多数は全幅の信頼をもってこたえようとした。その雄図も果たせなかつたのは、強力な伝統チームと地元を持つ新興チームの悲しみであった。

永雨にうたれ、泥にまみれてグラウンドを去る時、これで苦しみから解放される、という云い様のない安心感と共に、それまでの2年間の生活が一挙に胸中に去来した。そして、小竹先生の笑顔と各メンバーの顔に、大事をなした後のさわやかなものをみてとつたとき、市立中学ラグビー部の創生期のチームの終焉を感じとつたのであった。

## 26、7年頃のラグビー部

滝田 謙

(27年卒)

今年は市立高校にラグビー部が誕生して丁度20周年、小生のように北海道生れの異国者、しかも三年位で転勤してあるく私にとって偶々此の記念すべく年に秋田で生活する事が出来た事うれしく思うと同時に恰も20周年を記念するかの如く、母校のラグビー部が高体連大会で秋田工業を破り18連勝をストップさせ、しかも今年度の公式戦で秋田工業を破り市立強しの年をファンに与えた事、其の歴史に輝かしい1頁をきざんだ年に此の目で見、応援出来た事を非常にうれしく思い、且つ幸福感にひたる事がありす、そして其の間に20年の歴史が流れたのかと思うと感一層深いものがあります。

20周年を記念して思い出の記と云うものの、思い出をつづる程の年輩でも無いし、又思い出は胸の底にそつとして置くべきものだと言頃思つて居る私には、仲々ペンを持つ気にはなれませんでした。最近では“明治は遠くなりけり”と云う言葉を聞くにつけ、昭和の初期に生れた私には其言葉を聞くにつけ、又母校の部の創立20周年の流れと云う中に自らの年令を感じると同時に、灰色の時代に生まれた部がかくもたくましく成長したと思う時、私も其の一時期ラグビー部に籍を置き、今も其れをなつかしむ者の一人として其の折の事を書きしるしてもと云う事で書く事には全く縁の無い私が書きしたためる気になつたわけです。

26、7年頃と云えば、戦後の不安な世想からいささか明るいきざしが見えはじめて来た様な時であつたと思う。紆余曲折をへた男女共学も軌道にのりはじめの全県にさきがけての男女共



学は全県の羨望的と云うところだったかも知れない。其の意味で新しい校風作りと云う事で一部の先生方の懸念をよそに、非常に自由な校内風暴だった様な気がします。ラグビー部も創部以来秋田工業を破つたりして華やかな活動を続けて居りましたが、部創立の意図に反して全校生徒から誤解され、ラグビー部といえど何か不良グループの集りでは無いかと先輩には申し訳無いが其の様な風潮があった様な気がするの、私一人では無いと思う。勿論当時の事、美麗なユニフォームも無く、穴だらけのそして悪臭のはなつユニフォームを着て、廊下ではスパイクをはいてはいけないと云うおふれには無頓着威風堂々とあるけば女性が入り中性化しつつあった当時としてはそう思われても仕方が無いし、又スマートはおおよそ縁遠い存在であったのかも知れない。

そうした風潮の中で26年頃の部活動はその様な偏見の是正、又今迄の部活動からの脱却しラグビーの認識を高め様、其の為にどうしたら良いか。と云う事で部活動其のものが非常に高い次元と理念の下で積極的に活動した年であったと云う事が出来よう。特に小坂金四郎（男鹿市在住）、須磨勇（日本石油）が中心になって早朝の便所掃除、又校外の清掃、生徒会活動への積極的参加と云う事で新しい部の創造校風の刷新と云う非常に意欲的な年であったと思う。そうした活動が全校生徒の共感を呼んだ為か今想えばラグビーファンが非常にふえ、部活動を積極的に応援し、男女共に其の意味で非常に楽しい中にも活気の有る部活動であったと自分ながら自負して居ります。

一方試合の面では26年から前年度優勝チームが推薦出場と云う事で秋工の外に東北からもう

1校出場と云う事で其の年はチーム力も非常に充実し全国大会に出場を目標に非常に激げしい訓練で練習にはげみ、10月の秋田県予選で金農を大差で破り、東北大会に出たわけですが、試合は終止押し気味にすすめながら1つのトライも出来ず0対0で反則負けを喫した思い出は今でもくやしきとしてゴールポスト直下の試合が目には浮かぶ事があります。且試合終了のホイッスルと同時に放心状態になり、大声で泣き伏した菅原久史朗（太平療育園）氏の声は今でも耳もとに響く様な気がする。又逢えばあの時の話しになり、あの当時コーチが居て来れたらと愚痴るのは小坂キャプテン、そして酒をのめば必ず飯坂小唄が飛び出して来るのは此の滝田、とにかくなつかしいものです。又、負けた放心状態の中で誰もが思いついたのか救護の看護婦さんの所に行き足の“肉ばなれ”と適当な名をつけ太い足に包帯を巻いて貰い河原で体をあらいながら其の包帯を巻きほぐしているのを見て、負けた腹いせも手伝つてか我れも我れもと押しかけ看護係を手こずらせたのも負けた腹いせばかりで無く、傷の絶えない当時の練習の中で包帯など見た事も、ましてして貰った事も無い、当時物の無いと云う事が多分に影響して居たのかも知れない。26、7年頃のラグビー部の在籍者といえどこの福島大会が一番印象に残るわけで、今でも勝つて全国大会に出て見たかつたと同時に負けて良かったと思う時、其れは時の経過がそうさせるだけでやはり二度とないもの、敗者の悲哀よりも勝者の喜びを味わつて見たかつたと云うのが今の本音でもあるわけです。

遠征合宿、思い出す事は皆空腹と物の無さに連るわけですが、裏日本大会で新潟遠征の折に帰途新津で空腹に大きな体をどうする事も出来



ずは無精に騒ぎまわつて居たのも今はなつかしい。とにかく総べて無いと云う事に通じるわけですが其の中にあつてもラグビーを愛した人達のなごやかな交換があつた事だけは事実です。

とにかく過度期から安定、成長と進展の中に26、7年頃の私達には外的な条件は不足し、不十分なものばかりでしたが、精神的には非常に充実した時であつたと自分で自負して居ります。率先して事にあたろう、新しい部の魂を私達の手で作らねばならぬと云う意欲が満ちあふれた26年であり27年であつたと思う。私達の手で実現出来なかつた全国大会への出場は28年にはじめて実現、其れも私達の部の新しい意欲がみのつたのでは無いかと自らをなぐさめる事もあります。20年成人式其のかけに本当に灰色の時代に

私達以上に創造の苦しみを味わつた先輩、其の人達には私のこの文章が不穏当な所があるかも知れません。併し私達の時代は其の様な時であつた事は確かなのです。其の流れが交錯し、そして結晶しこの20周年が本当に部発展の輝かしい一頁を築こうとして居るのです。かつて私が男鹿の合宿で練習の疲れた体でうわごとの様に“何故私はこう苦勞しなければならないのか”？と言つた事があり其れを聞いた先輩に叱責された事があります。私は今叱責の意味がようやくわかりかけて来ました。苦しみの経験の上に力強く生きる精神力が養われると云う事です。当時自らの弱音を吐いた事を今情け無く恥じかしく思う事もあります。





佐 鈴 福 中 藤

昭和49年度



昭和50年度



昭和51年度





昭和52年度



昭和53年度



昭和54年度

南 鈴 泉 木  
 谷 木 義 内  
 三 邦 昌 仁 部





昭和55年度



昭和56年度



昭和57年度





昭和58年度



昭和59年度



昭和60年度



昭和61年度



昭和62年度



昭和63年度





平成元年度



平成2年度

平成3年度













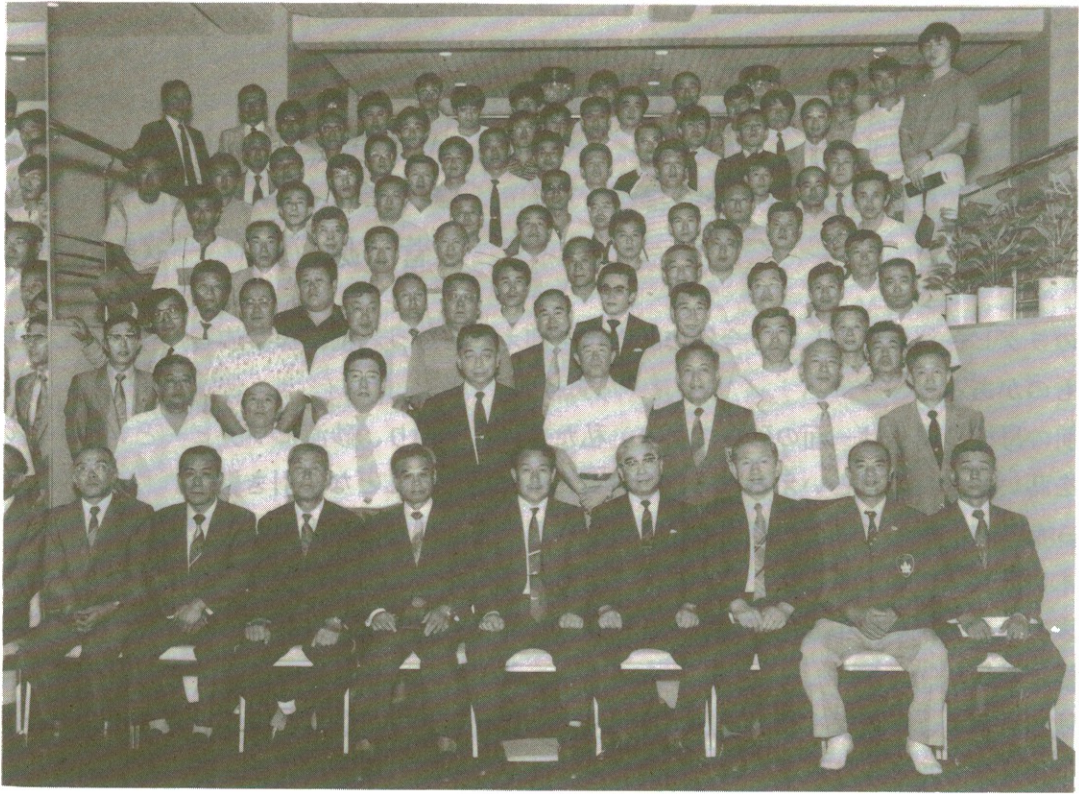


西村・佐藤(敬)先生に感謝のつどい 昭和59年 2月25日



渡部公男先生を囲んで 昭和60年 5月3日





創立 40 周年 記念







## 秋田 恋し

菅原 昭一（昭和23年卒）

母校のラグビー部が誕生して、今年で50周年を迎えるという。創部に参加した一人として感慨無量なものがある。

50年前の母校の周りは一面の砂丘であり、私たちは文字通り、砂漠にラグビーという一粒の粗末な種を蒔いてきたのだといえる。それが後輩たちに絶えることなく引き継がれ、育てられて今日に至ったこと、そしてまた、関係の先生方やOBの方々の熱心な指導と支援をいただいて、立派な樹木に成長していることに、心が震えるような感動を覚える。母校ならびにラグビー部関係各位に衷心よりお祝いを申し上げたいし、歴代のOB会役員のなみなみならぬご尽力に深甚なる敬意を捧げたい。

私が秋田に移り、母校に在籍し秋田の住人であったのは、父の仕事の関係と私の進学のため、昭和20年12月から23年3月までの短い期間であったが、秋田の風土と人々との出会いからいただいた影響は極めて大きく、私という人格の中核を形成しているといえる。とりわけラグビーと指導して下さった先生、チームメートからいただいたものが大きかった。苦しい練習を通して培われた体力ファイト、根性、判断力、チームワーク、ジェントルマンシップ、夢、熱情などが私を育て、私を支えて来てくれたと思っている。私は北海道で38年間の教職生活を終えたが、楽しい時、幸運なときもラグビーをやってきたお陰だと思ったし、苦しい時、困った時も私にはラグビーで培った切り抜ける力があると信じて当たってきた。秋田でラグビーと素晴らしいラグビー仲間に出会えたことを生涯の宝とし、心から感謝している。

11月から1月にかけて、ラグビーシーズンにはテレビに釘付けになってしまう。生涯にわたってこんな素晴らしい楽しみを持てたのもラグビーと出会っていたお陰である。北海道に住んでいるから北海道のチームを応援するのは勿論だが、それ以上に秋田のチームを応援している私である。しかも、どうみても今のところ秋田が強いし、本物である。現住所は北海道でも心の故郷（本籍地）は秋田になっている。OB会が毎年送って下さる会報は本当に楽しみで、役員の方々のご苦勞に感謝しながら、ラグビーを通し、健やかな人間形成に励んでいる後輩たちに声援を送っている。

それにしても、現今の高校生ラガーの体位体力の立派なこと、技術の高いこと、戦術に長けていることに驚くばかりである。練習器具の開発が進み、指導者のレベルが向上し、情報化、国際化が進み、50年前とは隔世の感がある。

私どものラグビー部は、敗戦直後の混迷と貧困の中で発足した。指導に当られた小竹先生は、外地から引き上げて来られたばかりであり、毎日の食料にも困っておられたのではないかと。なにもなかった。スパイクなどあるはずもなく、殆どの者ははだしだった。着る物も初めは剣道着や柔道着のお古だったりした。ボールは主将の吉田さんが工機部あたりからもらってきたチュー



ブのない皮にぼろきれを詰めて使った。そんな格好で、焼けつく砂原の上にはだしだからじっとなんかしてはいられない。布詰めボールを追ってひたすら走った発足の頃が懐かしく思い出される。砂丘に咲き乱れていた昼顔が鮮明である。

わが青春をラグビーに燃焼させた聖地、秋田恋し。函館の地より、母校、ラグビー部OB会の発展を祈念してやまない。



## 回 想

船 木 第 輔 (昭和28年卒)

人類史の中で未曾有の進歩と変動に富んだ長い、63年余の昭和が終わって8年、その長い激動の年月の中に思いをこめた、それぞれ一人一人の昭和があったと思う。人生には人生を決定づける多くの「めぐり合い」が存在し、この運命的・偶然的とも見える「めぐり合い」がその後の人生を決める場合もある。

私にとって人生の「めぐり合い」は、何んといっても高校時代が未だに回顧される。これは私のみでないようで酒席でも集会でも話題は高校時代の友人の話が実に多いようだ。

高校の友人の対象は今の若い人達のようにゼミ仲間とか、遊び仲間とかに限られずに高校という全体の中での友人という感じ方で、高校時代の印象が強い原因はいくつもある。その一つは当時、創部5年余のラグビー部に入ったことであり、若手の錚々たる先生、先輩に接し、憧れといってよいのか、敬愛できる人々があったことだ。もう一つは学校の勉強よりもっと大切な学習があるんだ、という雰囲気があり若輩は若輩なりに一所懸命に努力して一人前になろうとして、お互いが切磋琢磨した。

旧制中学から新制高校への変換期であり予科練（海軍飛行科練習生）がえり、（当時、旧制中学四年生ぐらいが対象）という豪傑、卒業迄に裏表を了えて一番偉いんだと嘯く者も居り、私から見ると兄貴というより親爺という感じの連中が自分なりの信条をもって闊歩していた。当時二年生の違いは、自分の知らないことをなんでも知っている、これは敵わないと思うと同時にこちら必死になる。私には、昔の高等学校というのは、人格形成にとって今のシステムよりも有用な面が多かった気がする。そういう雰囲気が漂っていた時代でもあった。

1946年（昭和21年）秋田市立高校（当時中学）でラグビー部が創部された。配給精米（10匁）36圓35銭・煙草（ピース）7圓・入浴料金（大人）70銭の時代である。満足な用具はなく、代用品が全てに活用され強剛で猛勇な屈指の若者の集団であった。スパイク替わりには地下足袋を荒縄で縛り、ジャージは使い古着の莫大小、ボール内のチューブ代用に稲藁を突込み誇りこそあれ、これが当時の練習風景と想像願いたい。

1934年（昭和9年）第16回全国中等学校ラグビー大会で秋田工業学校が京城師範と対戦8対5で初の優勝を遂げている。

1938年（昭和13年）第20回全国中等学校ラグビー大会で秋田工業学校が養成高普と対戦3対0で2度目の優勝を飾る。

1948年（昭和23年）第27回全国中等学校ラグビー大会の決勝で函館中学校と秋田工業は6対6の引き分け、両校優勝の規定で3度目の優勝を遂げた。このように近接に目標とする全国レベルの相手が存在した背景が創部の切っ掛けとなり、凄まじいばかりの情熱と打倒秋工を宿敵とした奮い立つ勢いが鎬を削ることになる。

1953年（昭和28年）この年第32回全国高等学校ラグビー・フットボール大会に初めて我が秋田市立高等学校が参加（大阪西宮球場）淀川高校と対戦、残念ながら6対9で破れたとはいえ、これまで数々積み重ねた試練が後々の励みとなり、粘り、意志、強靱な誠心が培われ、私の人格を形成した昭和が始まったものと自負できる。

挿話については機会があれば是非報告したい。

昭和28年秋田市営八橋ラグビー場が完成、開設を記念し全国高校選抜ラグビー大会を開催し北国ラグビー県に相応しい環境が整いつつ、8月には建都350年祭の祝賀行事も行なわれた。

未だ未だ書き足りないが、最後に、半世紀を経た現在、秋田市立高等学校（県立中央高校）のラグーマン同士は約600名に近いと思う。その一人一人が誇りを失うことなく、「あの日、あの時、あの大会の感動、感銘、思い出」を大切にそれぞれの胸の奥底に刻み込み、そのことを心の支え、生き甲斐としていただきたい。



## N Z 遠征の思い出

武石健哉（昭和63年卒）

創部50周年記念誌に寄稿できますことは、誠に光栄であります。私は現在東日本社会人リーグ、東芝府中ラグビー部に所属しており、今年こそは日本一を目標にチームメートともども練習に充実した日々を過ごしております。このようにラグビースポーツと共に歩んでいられるのは、恩師やラグビー部OBのご指導と多くの友人のご支援があったからであります。皆様に心からお礼を申し上げます。

はじめに

高校日本代表チーム選手に選ばれるまでいくつかの関門がありました。昭和63年6月27日付で、日本ラグビーフットボール協会、協会代表チーム強化委員長日比野弘名で、強化指導会参加推薦について当協会の選手選考会議で推薦選手について検討の結果、強化指導会参加選手として推薦することにしたという推薦書が届き、同年7月27日(水)から8月1日(月)までの5泊6日の日程で長野県菅平高原ラグビー場での合宿が始まりでした。振り返って見てこの強化指導会で基礎体力の測定記録が評価されたのではないかと考えております。

第2時強化指導会が10月17日(月)から22日(日)の日程で、63年京都国体ラグビー会場の亀岡市に



参加、この年は、東北代表となり少年男子秋田チームのフッカーとして国体に出場したのが一回戦で群馬に敗れ残念な結果となりました。

しかし、その直後ニュージーランド遠征の高校日本代表メンバーの監督になられた大阪工大高校の荒川博司先生から控室に呼ばれて今回の合宿が終わっても引き続き練習をするように言われたことが大変励みになり、嬉しさを隠すことができませんでした。

いよいよ第3次強化合宿並びに高校東西対抗試合出場候補選手に選ばれ、1月12日(木)から15日(日)の日程で、現在所属している東芝府中ラグビー場において合宿し、最終日の15日(日)日本選手権試合の前に行われた東西対抗試合に東北から選ばれたのは、男鹿工業の杓沢君と二人でした。

あこがれの国立競技場で80分間、高校生活最後のプレーができたし、あの観衆は日本選手権を直後に控え5万人近くに達していたと思います。すり鉢状のスタンドのため完成が何重にもエコーが掛かり、その中で一段と大きく自分の名前が聞こえてきます。国立まで応援に来ていただきました恩師脇坂憲雄先生に心から感謝し、本当にありがとうございました。

### ラグビー高校日本代表に選抜

日本ラグビーフットボール協会より、この度ラグビー高校日本代表チームがニュージーランドへ遠征にあたり、日頃の鍛練の結果が実り、貴君が栄誉ある日本代表選手に選ばれましたことを心からお祝い申し上げます。(原文) 秋田県から只一人選ばれ一行25名が決定になりました。

遠征期間は平成元年3月29日(木)出発し4月17日(月)帰国で遠征先の都市と試合日程は次のとおりでありました。

遠征先(都市)		試 合 日 程
Omaru	..... 4泊	4月2日 対クライストチャーチ高校選抜
Wellington	..... 3泊	4月5日 ウェリントン高校選抜
Levin	..... 4泊	4月9日 対レヴィン高校選抜
Rotorua	..... 1泊	
Thames	..... 2泊	4月12日 対ハミルトン高校選抜
Auckland	..... 4泊	4月15日 対 オークランド高校選抜

### ニュージーランドの地を踏んで

NZの地に降り立って、まず一番に感じたのは市内へ向かう車の中から見える風景は、丘に点在する絵に書いたような家々と空いている平地には必ず立っているラグビーポール…。そしてグリーン芝生を目にしたのが最初の光景でした。町のあちこちにラグビー場があるので、ポール一つあると手軽にラグビーを楽しめますし、グラウンドが芝生なので転んでもケガの心配がなく、小さい頃からタックルの練習や低いボールへの働きかけができる環境にあることを肌で感じ、大変羨ましく思ったものでした。大自然が豊富に残る環境はラグビース

ポーツに有利に作用し、ラグビーと生活が密着しているように感じました。NZでは5試合が予定されており、遠征先5地区の家庭にお世話になり、不安であった言葉の方も辞書を片手に身ぶり手ぶりをまじえ奮闘しました。各家庭での英会話は家族との会話が衷心で食事の時、町へ外出等日常会話は大変勉強になりました。このホームステイによって、NZの人々の温かさに触れることができたことも、意義のある体験でした。

### 交流試合に望んで

昭和63年の代表メンバーの顔ぶれは、現在、東芝府中でチームメートの釜沢選手、昨シーズン優勝した、サントリーのキャプテン永友選手、神戸製鋼で活躍中の元木や中道選手等があり、強い刺激を受けたメンバーでした。私自身、不安がありましたが秋田県の代表として、3年間学んだことが、どこまで本場のラグビーに通用するのか試してみようという気持ちにきりかえて望んだのでした。

試合の結果は、最終戦を前にして2勝2敗（うち1敗は17対18）と厳しい状況の中で5戦目を迎えて、チームメートのプレッシャーは最大であることが、お互いひしひしと伝わってきました。

「日本を代表して試合をするのだ…」という最終戦の重責とこの試合の意味を1人1人かみしめていたようです。

そして最終戦は、Auckland高校選抜との試合で20対9で勝利を得ることができ、その喜びと自信は、その後のラグビー人生に大きく影響しております。

交流試合を通してニュージーランドのラグビーは、先ずチャンピオン・スポーツとして「国技」として青々と広がるグラウンド、子供のころから名選手の話しを聞いたり、ラグビー「王国」のプライドを持っていること。またハード面を支えるソフト部分が充実していること等、世界のラグビースポーツの環境に感動いたしました。

### 後輩へのメッセージ

最後に、ラグビー競技を通して考えさせられることは、激しく、ハードなスポーツなので、一度はこの辛さ苦しさから、逃避したいと思ったことがあるのではないのでしょうか。

しかし、その辛さ苦しさを越えることによりすばらしい感動と喜びを得ることが必ずできることを決して忘れないでほしいと思うのです。ラグビーをやって何が良かったかという、すばらしい師と仲間に出会ったこと、いやになるほどの経験が人を育ててくれる、他人への思いを巡らす心「On the field, Off the field」が人生の教訓となっております。

秋田中央高校ラグビー部の皆さんも、仲間の成功を喜ぶ連帯感、仲間を信頼し、生かしあう精神等、多くの人生の宝物を手に入れ、ラグビーの本当のすばらしさを知ることができることを念じております。

「No Side」「One for All, All for One」

創部50周年の節目を機として、悲願である花園出場をめざし、益々のご発展とご活躍をお祈りいたします。



## 創部50周年記念事業準備会担当一覧

準備会会長	鈴木建男		
準備会幹事長	那波達造		
会員名簿担当	佐藤 徹	菅原 一義	加藤 明
		近野 信義	近藤 幸作
		石成 幸一	
財務担当	那波達造	菊地達雄	佐田 博
		金 義悦	佐藤 環
		開発邦彦	佐々木 幸悦
式典担当	海野達雄	小野忠征	鈴木建男
		佐田 博	金 義悦
		佐藤 環	開発邦彦
祝賀会担当	小林讓司	長谷川 寛	
渉外担当	鈴木建男	佐田 博	金 義悦
		佐藤 環	開発邦彦
		佐々木 幸悦	鎌田 照平

### 編集後記

秋田中央高校ラグビー部50周年の発行に当りましては関係各位、各方面の方々の多大なご理解とご協力を得ましたことを厚くお礼申し上げます。

50周年の節目という重要な年に、記念誌発行の責につけさせていただき重い不安を感じておりましたが、OB諸兄のご協力も多大にいただき何とか進めることができました。何よりも40周年の際にご協力いただいた近藤登氏の記念誌がありましたのでお手本とさせていただきます。

原稿の依頼、広告のお願い等、各先輩方も足を運んでいただき「40周年よりも50周年は」の意気込みでありましたが、時間的余裕もなく、心残りがありません。もっと多くの方々に声をかけて紙面に参加していただければとも思っております。

皆様にはご期待にそいかねない点多々あるとは思いますが、一生に一度のこととお許し願いたく思います。

今後とも母校ラグビー部の発展と尚一層のご活躍を祈念し、皆様のますますのご繁栄とご健勝をお祈りし編集後記とさせていただきます。

ありがとうございました。  
(菅原 一義記)

---

### 秋田県立秋田中央高校ラグビー部50周年記念誌

発行 平成 8 年 5 月  
編集 秋田県立秋田中央高校  
ラグビー部OB会  
印刷 旬 秋田タイプ  
秋田市千秋城下町3-24

---